

『茶会集』の評釈(一) —寛永年間の御成の茶会—

石井 智恵美*

An Annotation of “Chakaishu” (I):
Chanoyu in Onari, Official Visit to the Daimyo Shogun Made, during Kan'ei Period

Chiemi ISHII

抄録 『茶会集』は名古屋市蓬左文庫に所蔵される茶会記で、その多くが大名家の茶会の記録である。記録は寛永元年（一六二四）三月二十八日から享和二年（一八〇二）頃までの一七八年間（推定）に及び、乾（二九六頁）には、寛永元年三月二十八日から寛政九年（一七九七）頃までが収録され、坤（一九九頁）には明確な日付は特定できないが寛政年間にあったと思われる三回の茶会の記録の後に、安永四年（一七七五）十二月一日から享和二年頃までの茶会が記録されている。この茶会記には『東武実録』や『徳川実記』等に記載される事があまりない茶会の「道具立て」や「献立」等が記載され、茶の湯の資料として興味深い。

『茶会集』には全一二二件の記録があるが、その中の確実に茶会と分かる一二二件を検討の対象とし、今回は寛政年間の大名茶会として記録された二件について評釈した。

はじめに

『茶会集』は名古屋市蓬左文庫に所蔵される茶会記で、その多くが大名家の茶会の記録である。記録は寛永元年（一六二四）三月二十八日から享和二年（一八〇二）頃までの一七八年間（推定）に及び、乾（二九六頁）には、寛永元年三月二十八日から寛政九年頃までが収録され、坤（一九九頁）には明確な日付は特定できないが寛政年間にあったと思われる三回の茶会の記録の後、安永四年十二月十九日から享和二年頃までの茶会が記載されている。坤に記載されている茶会は日付が順不同になっているものや、日付が明確ではないものもあり、また例年と記されているものもある。書体は最初から最後まで同じに見え、同一人物による筆記であると思われる。

『名古屋市蓬左文庫国書分類目録』によれば、『茶会集』は江戸末期写とされているが、蓬左文庫でもその詳細は分かっていない。『茶会集』乾の一頁目に押されている蔵書印を見てみると印文は「張府内庫図書」であることが分かる。これは尾張家初代義直（一六〇〇～一六五〇）・二代光友（一六二五～一七〇〇）以後の「御側御文庫」の「蔵書印」として「尾府内庫図書」とともに広く用いられていた（「表御文庫」の蔵書印は現在確定できていない）。蓬左文庫によれば、これらの印は江戸中期に作られたと推測されているが、さかのぼって、古い蔵書にもこれらの印記が使用された例が見られるようである。「尾

* いしい ちえみ 文教大学教育学部学校教育課程家庭専修

府内庫図書」については印の²箱書きに天保九年（一八二八）に新調されたとあり、一般に、和書には「尾府内庫図書」、漢籍には「張府内庫図書」の印記が多いという。

これらのことを考え合わせると、『茶会集』はその時々で書きとめられてきた茶会の記録を享和二年以降に写しまとめたものと考えてもよさそうである。この茶会記には『東武実録』や『徳川実記』等には記載される事があまりない茶会の「道具立て」や「献立」等が記載され、茶の湯の資料として興味深い。

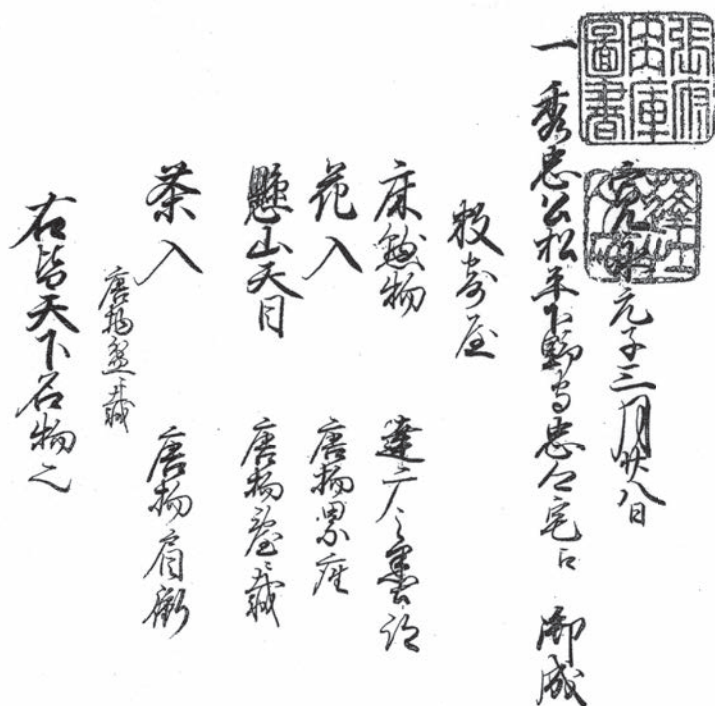
また、松尾宗政の茶会記録が多く記載されている。これは尾張家と松尾家の関係を考えるうえで重要ではないか。尾張徳川家は松尾流の茶の湯を習っていた可能性を考える必要があることを示唆している。その他、千宗左の茶会なども記録されており、表千家が尾張徳川家とどのような関係を持っていたのかなどがわかってくると面白いと考えている。表1には『茶会集』の中の全一二二件の記録の中の確実に茶会と分かるもの一二一件を記載した。今回はこの中から寛永年間の大名茶会として記録された二件について評釈した。

凡例

- 一、本書は、名古屋市蓬左文庫の架蔵にかかるものである。
- 一、翻刻にあたっては、原本の体裁を残すことを原則としたが、現在不使用の古体字・異体字は■で表し、その下に「」括弧で現在の文字を入れた。
- 一、本書の翻刻・掲載の御許可を賜った名古屋市蓬左文庫に厚く感謝いたします。

表紙 茶会集 乾
茶会集 坤

〔茶会一 影印〕



〔茶会一 原文〕

寛永元年三月廿八日

- 一 秀忠公松平下野守忠郷宅江 御成^②

数寄屋

床懸物 達磨之墨蹟
花入 唐物累座^③
懸山天目^④ 唐物臺二載

茶入 唐物肩衝

唐物盆二載

右皆天下名物也

〔現代語訳〕

寛永元年（一六二四）三月二十八日

一 徳川秀忠公が松平下野守忠郷の屋敷に御成をした。

数奇屋のしつらいは次のようである。

床の掛物は達磨の墨跡。花入は唐物の播座。茶碗は建蓋の天目で、唐物の台に載せてある。茶入は唐物の肩衝であり、唐物の盆に載せてある。右に示した道具類はすべて天下の名物である。

〔注〕

- （1）蒲生忠郷 陸奥会津藩二代目藩主。生没年は慶長七年（一六〇二年）～寛永四年（一六二七年）一月四日。享年二六歳。初代藩主蒲生秀行の長男。祖父は蒲生氏郷。徳川家康によって元服した折、松平姓と徳川秀忠の偏諱「忠」を与えられた。そこで、祖父の名より一字とつて松平忠郷と称した。従三位参議、下野守。祖父蒲生氏郷は『江岑夏書』に利休弟子衆七人衆としてその筆頭にあげられている。祖父氏郷から父秀行を経て、忠郷が受け継いだ茶の湯の道具類は多かった。『徳川実記』寛永元年四月五日条の將軍家光の御成の記述では「實にや忠郷が祖父宰相氏郷卿は。織田殿の聲にて封地百万石にあまり。殊更和歌茶道の数奇者にて。鑑賞の名高かりしかば。和漢の奇貨珍寶を蓄積する所理りなりとて皆人感賞す」と記されている。また、『徳川実記』の同月十四日条、大御所秀忠の忠郷邸への御成の記述においても「すべての作法は 御所臨駕のさまにかわらざりしかど。陳設の書畫古玩の類をはじめ。供給の調度等は。皆先日品の一種もなし。ことごとく別物なりしかば。人々彌驚愕したりしとなり」と記され、忠郷の所持する道具類の多さが分かる。
- （2）この日付の御成は、『徳川実記』・『東武実録』には記載されていない。しかし、この御成を『徳川実記』では寛永元年四月十四日条に「けふも水戸宰相頼房卿。藤堂和泉守高虎曉天より御先にまかりむかえ奉る。ならせ給へば。直に露地口より忠郷迎へ奉り茶室に入らせらる。頼房卿。高虎も従ふ。御膳を献じ御中立あり。再度いらせ給へば。頼房卿。高虎

も同じく陪座す。先に床に掛し春甫の書幅を撤し。花筒ばかりをかけて。燕子花を下に置たりしかば。大御所御みづから花を挿せ給ふ。兼て其御風致拜覧せん事を願ふゆへなるべし。忠郷点前の茶を献ず。召上られて頼房卿にたまひ。卿より忠郷にめぐり高虎にて納む。後の御炭も大御所御手づからあそばし。畢て鎖の間にわたらせ給ひ茶菓をすゝめ奉る」と詳しく記述した後、「或は大御所の臨駕を三月廿八日。御所の臨駕を同月廿九日とする書もありといえども。今國師日記。大内日記。坂上池院日記の類。當時の記録を得て治定せるなり」と注を付けている。しかし、『東武実録』にはこの日の数奇屋道具として「一懸物 春甫 横物。一釜 松風。一水指 古備前。一茶入 小紫。一盆 若狭。一花入れ（砧）、また銅壺の間簀として「二懸物 瀟湘夜雨（牧溪筆）。一古今集為相筆」と記載している。これらはこの『茶会集』に示される道具類と明らかに異なる。これらの記述を考え合わせると、大掛かりな御成ではないにしても、寛永元年三月廿八日に秀忠公の^{3,4}渡御はあったのではないかと考えられる。

（3）累座 【播座】茶入の首（甌）や肩の周囲に鋲を打ったように貼り付いた文様の並ぶものを指し、播茶・播座・累座などとも書く。唐物でこの文様を有するものは形も一定しており、その形は東北大学所蔵の狩野文庫本『君台観左右帳記』の「一抹茶壺事」の項目に図示されている。播座は釜にも花入にも見られる。花入の場合は茶入や釜に施されるほど多数の播座の並びは見られない。「播茶」は、『新札往来』（一三六七年成立）にも見られる。

（4）懸山 建蓋のこと。中国宋・元の時代に福建省建寧府水吉鎮にあった建窯（建陽窯）で作られた陶器の器（蓋）は杯の意の総称であるが、宋代には喫茶用の天目茶碗を多く焼いた。そのため建蓋とは「建蓋の天目茶碗」を指し我が国には鎌倉末期に請来され、茶人に珍重された。釉面の変化は様々であるが、曜変天目、油滴天目と呼ばれるものに優れたものが見られる。

〔茶会一 影印〕

一寛永十七年九月十六日毛利甲斐守秀元
於品川御茶奉献

御

御相伴

尾張義直卿

水戸頼房卿

松平越後守光長

加藤式部少輔明成

三疊大目

像ヲ一コマ以下二方御相伴衆被座

〔茶会一 原文〕

一 寛永十七年九月十六日毛利甲斐守秀元

於品川 御茶奉献

御

御相伴

尾張義直卿⁽⁶⁾

水戸頼房卿⁽⁷⁾

松平越後守光長⁽⁸⁾

加藤式部少輔明成⁽⁹⁾

三疊大目

縁ヲ一コマ以下二方御相伴衆被座⁽¹⁰⁾

〔現代語訳〕

一 寛永十七年（一六四〇年）辰年九月十六日、毛利甲斐守秀元は品川に於いて將軍様に御茶を奉献した。お相伴は尾張義直卿・水戸頼房卿・松平越後守光長・加藤式部少輔明成である。茶室は三疊大目。疊の縁より一コマ以下がつて二方にお相伴衆が座られた。

〔注〕

（5）毛利甲斐守秀元 長門国長府藩主。生没年は天正七年（一五七九）十一月七日～慶安三年（一六五〇年）閏十月三日。官位は右京大夫、甲斐守、侍従、参議（宰相）、長門守。父は毛利元就の四男穂田元清（毛利伊豫守元清）。天正十三年毛利右馬頭輝元の養子となる。文禄四年、豊臣秀吉の養女（秀長の娘）と結婚するも、この妻は慶長十四年に死没する。同十八年、東照宮の養女（松平因幡守康元の娘）と結婚。秀元は茶道や和歌に秀でており、数寄の道に達した人物として知られていた。慶長初年、古田織部（重然）の高弟となっていたが、寛永十七年九月十六日、家光の江戸品川御殿傍らの新亭で茶を点じ、また求めに応じて和歌を詠んで賞賛された。この日の茶会については、『寛政重修諸家譜』巻第六百十七に、「かつて秀元が数寄の道に達せしことをきこしめされ、品川御殿のかたはらに新亭を営み、茶会を催すべき旨仰をかうぶり、亭すでになり、九月十六日午刻台駕を枉らる。尾張大納言義直卿、水戸中納言頼房卿、松平越後守光長、加藤式部少輔明成御相伴たり。まづ常の御殿に御渡あり。秀元参りて迎へまいらせ、やがて数奇屋にいらせたまひ、御茶終りて廻り炭の興あり。（中略）御土器しばしばめぐりて別の茶亭に御座をうつさる。東海寺の沢庵も御前に候す。」と詳細が記述されている。秀元は正保元年にも家光の命を受けて江戸城西の丸山里の数寄屋で点茶を献じている。

（6）尾張義直 御三家の一つ、尾張徳川家の初代。徳川家康の九男。生没年は慶長五年（一六〇〇）十一月二八日～慶安三年（一六五〇）五月七日。官位は従二位権大納言。学問を好み、中でも儒学を奨励し、藤原惺窩の高弟堀杏庵を招いて、名古屋城内に孔子廟を営んだ。また、蔵書家として知られ、父家康より贈られた「駿河御讓本」を中心に、多くの書籍を集めて御文庫に保存した。義直が権中納言であった元和九年（一六二三）二月一三日、この尾張徳川家鼠穴邸への將軍秀忠による御成があった。

これは秀忠の將軍としての最後の御成であり、徳川將軍家が徳川一門に對して行つた初めての御成であつた。この御成は、徳川美術館の図録『徳川將軍の御成』によれば「数寄の御成」ともいわれ、『元和御成之記』（徳川美術館所蔵）に詳細が記されている。その後の將軍家御成の規範となつた。

(7) 水戸頼房 御三家の一つ、水戸徳川家の初代。生没年は慶長八年（一六〇三）八月十日～寛文元年（一六六一）七月二十九日。官位は正三位権中納言。没後は威公と諡された。徳川家康の十一男（末子）。慶長十年（一六〇五）、頼房三歳のとき常陸国下妻十萬石、慶長十四年十二月十二日、七歳のときには水戸二十五萬石の城主（水戸徳川家の創設）となつたが、幼かつたため藩政に携はることはなかつた。元和五年（一六一九）に頼房（十七歳）が水戸城に入つた後には城下町としての水戸の整備、領内総検地、水利事業、鉾山や新田の開墾などに努めた。また、家光から賜つた二十一萬平方メートルにも及ぶ江戸小石川の上屋敷の敷地内に後の後樂園の元となる庭園を築いた。儒学、神道などの學問にも熱心であつた。

(8) 松平越後守光長 初代越後高田藩主。生没年は元和元年（一六一六）十一月二十九日～宝永四年（一七〇七）十一月十七日。官位は従三位右近衛權中將。父は二代將軍秀忠の兄結城秀康の長男で北庄藩主松平忠直。母は秀忠の三女勝子。幼名は仙千代。寛永六年に元服の折、將軍より偏諱を与えられ名を光長と改めた。寛永元年（仙千代十歳）に高田藩主となつた後は、小栗正高・美作父子の補佐を得て、藩政の整備や財政再建を始め、中江用水の開削、大湊郷の新田や魚沼銀山の開発、高田町の整備、今町港の改修などを進めた。しかし、光長の嫡子綱賢が世継のないまま死去したため藩内に争い（越後騒動）が起こり、光長はその責任を問われて天知元年（一六八一）伊予国松山に配流。松平隠岐守定直にお預けとなる。貞享四年（一六八七）、赦免となり官職も復した。

(9) 加藤式部少輔明成 二代陸奥国会津藩主。生没年は文祿元年（一五九二）～寛文元年（一六六一）正月二十一日。官位は式部少輔、侍従。父は蒲生氏の後に会津藩主となつた加藤嘉明。嘉明は將軍秀忠に木枯肩衝を献上し、桂離宮の松琴亭前に架けられた石橋を寄進したことでも知られている。蒲生氏が築いた若松城（七層の天守、櫓、馬出しなどを備える）は慶長十六年の大地震で大きな被害を受けたが、後に明成

が大改修を行ない、五層の天守に改めた（寛永十六年）。小堀遠州の江戸在府時の茶会には、寛永十六年一月二十三日と寛永十七年八月七日に明成の参会が見られる。寛永二十年、病を理由に領地を返上し、退隱した。

(10) 『慶長以来御茶之記』（名古屋蓬左文庫所蔵）には「三疊大目縁ヲ一コマイ下テ二方ニ御相伴衆被座」とある。

〔茶会一 影印続き〕

床 南堂ノ書跡
主福 藏后板無ノ花入
御常金名物
山菜入 秋鳥肩柳 唐物名物
茶碗 今焼黒市飯白 熊ノ新ウ用
山梨茶碗目品
茶抄 色摺利休化
炭斗 かく
茶合 茶合唐物名物

〔茶会二〕 原文続き

床 南堂ノ墨蹟^①

秀吉被議日本唯一候之名物

無鏝^⑫ 載薄板置之 花不入

瓢單釜^⑬ 名物

御茶入 都鳥肩衝^⑭

茶碗 唐物名物

今焼黒御紋白

態々新ヲ用

御替茶碗同品

茶杓 色替利休作^⑮

炭斗 ふくへ^⑯

香合 矢筈^⑰ 唐物名物

水指 冠箱名物^⑱

火箸 象眼 唐物

水指 火箸 水鉢 蓋置 羽箒 御茶畢廻炭有之炭取度々 取替出ル皆唐物名物也

〔茶会二〕 現代語訳続き

茶室の床には南堂の墨跡がかかる。秀吉が日本で唯一の名物と言う花入は「無鏝（かぶらなし）」で、薄板の上に載せてあり、花は生けていない。釜は瓢單釜で名物である。茶入は「都鳥の肩衝」で唐物の名物である。茶碗は黒の今焼で、白の御紋の模様がある。替え茶碗は同じ品で、わざわざ新しいものを用いた。茶杓は「色替」で利休作である。炭斗はふくべ。香合は「矢筈（やはず）」で唐物の名物である。水指は「冠箱」で唐物の名物である。火箸は象眼のもので唐物である。水鉢（みずこぼし）は面桶。蓋置は紹鷗が切った竹輪である。羽箒は鶴の羽製である。御茶が終り、廻炭があった。炭取は度々取り替えられたが、どれも唐物名物である。

〔注〕

〔1〕南堂 了庵清欲 りようあんせいよく（一二八八―一三六三年）のこと。中国の元の時代の僧（臨済宗）。南堂は号。了庵の書は他の禅林墨跡と比べて温順整齊な筆致であり、これは当時の名筆趙子昂（ちようすこう）の影響を良く反映したものであると推測されている。同門には来朝した竺（仙梵僊（じくぜんほんせん））や日本の僧である月林道皎（げつりんどうこう）や石室善玖（せきしつぜんきゅう）らがいたため日本でも知られており、彼を訪ねる日本の僧侶も多かった。そのため日本に伝わった墨跡も多く、茶人の間で珍重された。代表的なものは国宝「的蔵主送別の偈」であるが、これには大徳寺の玉室・沢庵・江月らの極書が付属し、松平不昧の有に帰したが昭和十三年同家（松平直亮氏）より帝室博物館（現東京国立博物館）に寄贈された。極書を書いた沢庵和尚は

〔茶会二 原文続き〕

書院

床懸物 雪舟筆西湖之圖 名物⁽²⁰⁾

花入 金おし鳥名物

堆朱四方ノ机二陶之⁽²¹⁾

香爐 染付

堆朱長盆二載之

香匙 大箸（火箸）

梨子地蒔繪

香合 東山殿⁽²²⁾ 堆朱印籠

陶 堆朱盆 皆唐物也

公任古今上下⁽²³⁾

行成ノ

朗詠 二卷⁽²⁴⁾香合 青貝唐物⁽²⁵⁾木香形 紅葉硯 名物⁽²⁶⁾

料紙三色上二置

計算 唐物⁽²⁷⁾

水引箱 唐物

『茶会集』では省略。

『慶長以来御茶之記』

には記述が有る。

〔茶会二 現代語訳続き〕

書院のしつらいは、次のようである。床の懸物は雪舟筆の西湖の図。名物である。花入は金の鴛鴦。名物である。堆朱の四方の机に置く。染付の香炉は堆朱の長盆に載せる。香匙は火箸。梨地の蒔絵の香合は東山殿御物の数寄の香合である。堆朱の印籠は堆朱の盆に置く。これらは皆唐物である。公任の古今集上下巻。行成筆の和漢朗詠集二巻。

香合は青貝で木瓜形の唐物である。紅葉の硯は名物である。（三色の料紙の上に置かれ、唐物の水引箱の中に入れてある。文鎮は唐物である。）

〔注〕

(20) 雪舟 雪舟等楊（せつしゅうとうよう）。生没年は応永二十七年（永正三年（一四二〇）一五〇六）。室町時代の画僧。雪舟の作品は国宝や重要文化財に多く指定されているが、その中に「西湖之図」は見えない。

(21) 堆朱（ついしゅ）彫漆の一種。東北大学所蔵の狩野文庫本『君台観左右記』では「一彫物之事」で明代の漆工家と推定される張成作の剔紅（ちっこう・ちつこう）・堆紅が第一であるとしているが、剔紅・堆紅の個別の説明の次に堆朱をあげて「色あかし。地きうるし。手あさくして、ほりめにくろきかさねなし。たたあかくぬりあけたるを云也。但、堆紅斗（ばかり）の堆朱、堆朱斗の堆紅ノ云事あり」と説明している。

(22) 東山殿御物 東山御物ともいう。東山殿とは足利八代將軍義政のこと。將軍職を退いた後に東山に隠居したところからいう。東山殿御物は三代將軍足利義満から義政までの代に収集された宝物である。その中でも絵画に関しては能阿弥撰とされる『御物御画目録』が残されているが、所蔵品の多くは流出したのもも多い。文明八年（一四七六）の室町第の焼亡の際には「御蔵」も焼けたとの推測もあり、その実態は明らかではない。

(23) 公任 藤原公任（ふじわらのきんとう）。平安時代中期の公卿であり歌人。生没年は康保三年（長久二年（九六六）一〇四一）。官位は正二位権大納言。祖父は摂政関白太政大臣清慎公実頼、父は関白太政大臣廉義公頼忠。母は後醍醐天皇の皇子である中務卿代明親王の娘巖子。公任は『和漢朗詠集』の撰者としても知られている。『古今和歌集』は醍醐天皇の勅命により紀友則・紀貫之・凡河内躬恒・壬生忠岑の四人の撰者により編集され、延喜五年（九〇五）四月十八日に奏上された。『古今集』ともよばれる。『古今和歌集』は貫之自筆の本と称するものや藤原定家が書写校訂した『定家本』、多くの古筆切、藤原清輔が書写した『清輔本』、そして唯一の完本として現存最古とされる国宝『元永本』、などが残されている。この茶会で飾られている『公任古今上下』は¹⁰「平成になって突如、同じく平安書写の完本という形で公任筆本が出現した」と注目

されている『古今集』の完本であろう。粘葉装の上下二冊の冊子本であり、小松茂美氏によれば十二世紀初め頃の書写であると推測されている。この時は忠郷のもとにあったことが分る。

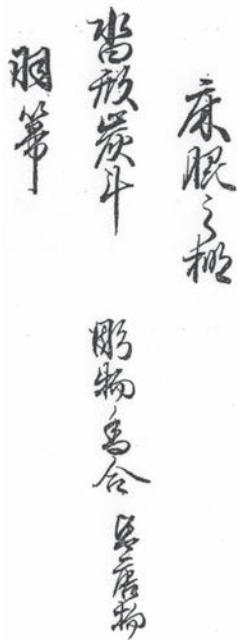
(24) 行成 藤原行成（ふじわらのゆきなり）。平安時代中期の公卿であり、能書家。生没年は天禄三年（万寿四年十二月四日（九七二—一〇二七））官位は正二位権大納言。行成は多くの才能に恵まれ、藤原佐理（ふじわらのすけまさ）亡き後は能書の第一人者として三条・後一条の二代の天皇に仕えた。真跡には『白氏詩卷』があり国宝として東京国立博物館が収蔵している。原文には「行成ノ朗詠 二卷」とのみ記されているが、『徳川実記』寛永十七年九月十六日条には「行成卿筆の朗詠集」と記載されている。『和漢朗詠集』は公任の撰であるが、能書家の行成が書写したものが飾られたと分る。

(25) 香合 香合は木瓜形と推測する。木瓜形は瓜を輪切りにした形と考えられているが、諸説あるようである。茶道具では香合にこの形が取り入れられているが、青磁の香合とされている。『徳川実記』には「香合は螺鈿」と説明されているので、これは青貝を使った螺鈿であることが分かる。

(26) 紅葉硯 原文には「紅葉硯 名物」とのみ記されるが、『徳川実記』には「紅葉硯料紙三色唐物の水引箱」と、『慶長以来御茶之記』には「紅葉硯 名物 料紙三色上二置計算唐物」と説明がある。これは紅葉の硯が三色の料紙に載せられ唐物の水引箱に入れられていることが分かる。

(27) 計算 けいさん、けさん、卦算。文鎮の一種。横に長くてつまみがある。紅葉の硯と同じく料紙に乗せられ水引箱に入っている。

〔茶会二 影印続き〕



〔茶会二 原文続き〕

床脇之棚

沓形炭斗⁽²⁸⁾

彫物ノ香合 皆唐物

羽箒

御茶入

文琳⁽²⁹⁾
唐物 懸袋陶四方盆 唐物⁽³⁰⁾

御茶碗

吉野高麗⁽³¹⁾
名物

〔茶会二 現代語訳続き〕

床脇の棚の上には次のものが飾られた。沓形の炭斗、彫物の香合、これらは皆唐物である。羽箒が置かれ、御茶入は唐物の文琳で掛袋は唐物の四方の盆の上に置く。御茶碗は吉野高麗で名物である。

〔注〕

(28) 沓形炭斗 沓形炭斗はその形が歪んだ楕円をなし、沓状に見えるところからこの名が付いたもの。

(29) 文琳 茶入れの形の一つ。文琳とは林檎のことである。小形で林檎に似た形をしている。高橋義雄氏は「文琳は最も黄釉の景色に富むが故に、之を稱して文琳釉と云ひ、茶人は殊に之を珍重せり」としている。

(30) 四方盆 『慶長以来御茶之記』には「掛袋四方ノ盆二置盆又唐物也」と記述されている。

(31) 吉野高麗 高麗茶碗は李朝時代に朝鮮半島で焼かれた茶湯の茶碗の総称である。吉野高麗という茶碗についての詳細は不明であるが、『慶長以来御茶之記』及び『徳川實紀』の寛永一十七年九月一六日条にも床脇之棚の茶碗は『吉野高麗』とある。

〔茶会二〕 影印続き

次

床 三幅対

中 牧溪観音 賛 寧退耕

左 政黄牛 同筆 寧退耕

右 茶陵郁庵主 同筆 賛 寧退耕

文臺 筆臺 短冊 文鎮

〔茶会二〕 原文続き

御次之間

床 三幅対⁽³²⁾

中 牧溪観音⁽³³⁾ 賛 無準筆⁽³⁴⁾

左 政黄牛⁽³⁵⁾ 同筆ノ賛 寧退耕⁽³⁶⁾

右 茶陵郁庵主 同筆 賛 寧退耕

文臺 筆臺 短冊 文鎮

〔茶会二〕 現代語訳続き

御次の間の床には、三幅対の懸物が掛けられている。中央は牧溪の観音図で賛は無準の筆。左は政黄牛の図で同じく牧溪筆。賛は寧退耕。右は茶陵の郁庵主の図で同じく牧溪筆。賛は同じく寧退耕。文台の上には筆台、短冊、文鎮が置かれる。

〔注〕

(32) 三幅対 三幅で一対をなす掛物。本来は仏画で、中央に本尊を、左右に脇侍(きょうじ)の菩薩を掛けた事による。

(33) 牧溪 牧溪法常(もっけいほうじょう) 中国の南宋時代末から元の初め頃の画僧。蜀の出身と推測されている。法常は法諱。牧溪は号。生没年は不明。牧溪作の水墨画には国宝や重要文化財に指定されているものもあり、日本の水墨画壇に大きな影響を与えたといわれるが、いずれも足利將軍家に伝来した。

(34) 無準 無準師範(ぶじゅん(しばん)しはん) 中国、南宋時代の臨済宗の僧。生没年は一一七七一二四九年。蜀の劍州(四川省)の人。宋代禅林中、傑出した人物であった。破庵祖先(はあんそぜん)に参じてその法を嗣ぎ、後に中国五山第一位の径山寺(きんざんじ)に遷り、同寺に住した。雪巖祖欽(せつがんそきん)・無学祖元(むがくそげん)・兀庵普寧(ごつたんふねい)・円爾弁円(えんにべんねん 聖一(しょういち) 国師)らの法嗣を輩出し、画僧牧溪法常もその法席に列した。紹定六年(一二三三) 南宋の理宗皇帝より仏鑑円照禅師の号を賜る。

(35) 政黄牛 せいおうぎゅう。中国杭州の浄土院の惟正禅師(ゆいししょうぜんじ)は黄牛に乗って歩き、その牛の角に身の回りの品を掛けていたと伝えられている。禅師は政氏の出身であるところから、その図は政黄牛と呼ばれた。

(36) 寧退耕 退耕徳寧(つかんとくねい) 南宋時代後期の臨済宗破庵派の僧。生没年は不詳。無準師範の法を嗣ぎ、後に中国五山第二位の霊隠寺に住した。現在、遺墨は常盤山文庫所蔵の「上堂偈」(重要文化財)のみである。

卷子

大

袋題

袋全藤紋桐

以柔碗

青德

壹月

四知堂松雪齋

水指

抱朴子

拓跋立

新耳唐詩

水熟

南雲象服ノコウシ

吳昌碩

三足人形

烟蒂

原文続き

臺子 (37)

大 棗⁽³⁸⁾

袋衣縣

袋金襴紋桐(39)

御茶碗

青礬

金風爐(40)

四方物御釜⁽⁴¹⁾

松向寺⁽⁴²⁾
名物

水指

抱桶（五）
名物

柄杓立⁽⁴⁾

龍耳(4)
唐物

水翻(46)

南蛮象眼ノコウシ⁽⁴⁷⁾

蓋置

三足人形⁽⁴⁸⁾

羽簫

〔茶会二 現代語訳続き〕

台子の上には袋を懸けた大棗が置かれる。袋は金襴の地で桐の模様がある。御茶碗は青磁である。風炉は金であり四方物の御釜である。銘は松向寺で名物である。水指は抱桶で名物である。柄杓立は龍耳で唐物である。水盞は南蛮物で象眼の合子（盒子）である。蓋置は三方の人形である。羽箒も置かれている。

〔注〕

(37) 臺子 だいたす。台子。茶道で用いる置棚の一種。熊倉功夫氏によれば「茶道では最も格式の高い形式を、書院台子の茶というように、書院で台子に唐物の茶碗や茶入を飾ってとり行われる点前を式正の茶とし、台子はその形式を象徴する棚と見なされている。」(国史大事典)とされる。台子が日本に伝来し、茶の湯に取り入れられた経緯は諸説あるが、台子が茶の湯の棚として使用された初見の史料は『松屋会記』の天文六年(一五三七) 十四屋宗伍茶会の記録である。その後、天下人の茶が桃山時代に生まれ、その茶道の荘厳化に伴って台子は茶の湯の真の位にすえられたと考えられている。ここでも棚の地板の上に風炉釜、水指、杓立てなどを置き、天板の上に御茶碗(台天目)、茶入などを飾る。

(38) 大棗 おおなつめ。棗は薄茶器の一種であり、大中小の別がある。棗は塗師の羽田五郎によって創案されたと言われている漆工の容器である。基本的には黒塗りで、利休好みの大棗は蓋径七・五センチ、高さ七・三センチである。それぞれ少しづつ寸法は異なるが、凡そこれを基準に作られている。

(39) 金襴 きんらん。金糸を紋様を織り出す横糸（絵緯 えぬき）として用いた織物の総称。日本に伝来したのは鎌倉時代からで、室町時代中期には日本でも金襴・銀襴が作成されていたと考えられている。茶道の仕服や軸物の表装などに用いられ、「名物裂」（めいぶつぎれ）として今日に伝えられている。

(40) 金風爐 金風炉。金属製の風炉をいう。唐銅風炉（からかねぶろ）と鉄製風炉がある。室町時代には唐銅の風炉が用いられていたが、室町時代後期の『三十二番職人歌合』には、火鉢売として土風炉を売り歩く商人の姿が描かれており、土風炉も用いられるようになった。この金風炉は唐銅の風炉と考えられる。

(41) 四方物御釜 茶湯釜の一種。四方釜。胴部が四角い釜。釜の形が工夫される過程で、好みの釜として作られたと考えられる。

(42) 松向寺 釜の銘と思われる。松向寺と読めるが、『慶長以来御茶之記』では「松向寺」、「徳川実記」では「松尚寺」としている。

(43) 抱桶 だきおけ。水指の一種。南蛮の壺を水指として用いたもの。東山時代から桃山時代の頃まで使われたと考えられているが、現存するものでは野村美術館所蔵の「毛織抱桶水指」が知られている。

(44) 柄杓立 ひしゃくたて。柄杓と火箸を立てておく一輪挿しほどの器具。花瓶を転用した時代もあったようである。台子皆具（だいすかいぐ）の一つ。台子以外では長板・立礼式の総荘（そうかざり）に使用される。金属製・陶磁器製があり、耳付のものもある。

(45) 龍耳 龍の形の耳。壺や瓶を初めとして杯や鉢など様々な機器につけられた耳の形の一つ。実用と装飾用とがある。耳には雲耳、管耳、篋耳、鯢耳等がある。

(46) 水甕 みずこぼし。建水の古称。

(47) コウシ ごうし 合子・盒子。元来は蓋と合わせて一組とするので合子という。合器（ごき）ともいう。茶道でいうところの建水の一様式。蓋物の身の方を利用したものである。

(48) 三足人形 ここでは「三足人形」と読めるが、『慶長以来御茶之記』では「三方ノ人形」、「徳川実記」では「三方の偶人」としている。いずれにしても、これは三人形（みつにんぎょう）の蓋置と思われる。中国では筆架・墨台として用いられる文房具であるが、これを蓋置に見立てたものである。

〔茶会二 影印続き〕

堂燠（ろ）方

盆石

羽箒

物抄

茶盃

水指

水指

水指

茶碗

茶碗

深月御紋

茶入

瓢箪

唐物

早稲花有（り）

盆花入

扇下士力娘靈照女力花
盆下士力娘靈照女力花

今并茶葉六箇力孫之の巻々茶葉
子茶葉又傳く送秀元と下茶葉
茶葉は唐物初尚と云々

〔茶会二 原文続き〕

堂燠之間

盆石（ろ）

羽箒

柄杓

蓋置

臺（ろ）

水指

水指

茶碗

ハケメ（ろ）

又

茶碗

染付御紋

茶入

瓢箪

唐物

袋

畢而廻花有之

籠花入 龐居士カ娘靈照女カ持花
筐トテ紹鷗秘藏持之

今井宗薫ハ鷗カ孫也御遣之(の) 宗薫カ

子宗吞又得之送秀元天下名物也

此節沢庵和尚被 召之⁽⁵³⁾

〔茶会二 現代語訳続き〕

堂炉の間には、盆石、羽箒、柄杓、蓋置、赤い台、水指、水麴、ハケメの茶碗と又御紋を染付けた茶碗があり、茶入は瓢箪で唐物、袋を懸けて置いてある。

廻花がなされた。籠花入は龐(ほう)居士の娘靈照女が持つ花籠という紹鷗の秘藏だったものである。今井宗薫は紹鷗の孫である。お遣いの宗薫の子どもの宗吞(そうどん)も又この籠を得たが、この天下の名物を秀元に進呈した。

この時、沢庵和尚も呼ばれた。

〔注〕

(49) 盆石 ぼんせき。本来、箱庭や盆山・盆景に用いる石をいうが、ここでは室内に趣のある自然の石や砂で盆の上に風景をつくり出したもの。また、その盆景を鑑賞することをいう。

(50) 臺 だい。ここでは台とのみ記されているが、『慶長以来御茶之記』、『徳川実記』には「赤臺」と記されている。

(51) ハケメ 刷毛目茶碗。高麗茶碗の一種。鉄分が多く色の濃い胎土に刷毛で白泥を掛けて、その刷毛目を文様のように浮き立たせたもの。和物の茶碗でも刷毛目を意匠としたものはある。

(52) 靈照女カ持花筐 靈照女(れいしょうじょ)は唐物手付籠の一種で、やや長めの胴に提げ手が付いているもの。唐代の儒者として名高い龐(ほう)居士の娘靈照は幼くして禪宗に帰依し、長じては父母に孝養を尽くすために街に出て籠を売ったという中国の伝説に基づいて描かれた道釈画の少女が持つ籠に似たものをいう。

(53) 沢庵和尚 江戸時代初期の臨済宗の僧。諱は宗彭(そうほう) 生没年は天正元年(正保二年(一五七三)一六四五)。慶長十四年(一六〇九)三七歳で大徳寺一五三世の住持となったが三日で退院。その後、寺院法度・紫衣法度をめぐり幕府に抗弁し、寛永六年(一六二九)出羽国上山に流された。寛永九年許されて京に戻った。後に三代将軍家光の帰依を受けて寛永十五年江戸の品川に東海寺を開創した。沢庵和尚のこの日の御成への参加については、『徳川実記』には「僧澤庵を召て御酒下さる、程」と記されており、『慶長以来御茶之記』には「大樹(将軍の意)ハ自其御茶室二入セラル東海寺ノ住持澤庵和尚被召寄 御盃数返重リ既ニ二十六夜ノ月出ル時二盃ノ上ニテ亭主歌一首可仕ト(中略)澤庵モ一首ト仰ケレバ(後略)」とある。『御日記大略提要』寛永十七年九月十七日条には「毛利秀元様品川御茶被献事 秀元并沢庵詠歌之事」とある。この時、秀元が詠んだ歌は「降雨モ今日ヲ晴トヤ我君ヲ待得シ山ノ甲斐ハ有ケリ」であり、澤庵が詠んだ歌は「夕暮ヲ惜ミヲシマシ木ノ間ヨリ早サシノボル海コシノ月」である(『慶長以来御茶ノ記』)。

謝辞

本研究を行うにあたり、資料収集にご協力いただきました名古屋市蓬左文庫の皆様、また翻刻を行うにあたりご指導をいただきました社会専修・中村修也先生に深謝いたします。

文献

- 1 織茂三郎「蓬左文庫の蔵書印」『ほうさ』第四号 五頁、名古屋市蓬左文庫、一九八〇年
- 2 『蓬左文庫 歴史と蔵書』四一頁、名古屋市蓬左文庫、二〇〇四年
- 3 『御日記』寛永元年三月廿八日条「将軍家〇徳川秀忠公 渡御松平下野守忠郷之館、(中略)松平下野守、本名蒲生兼日前将軍秀忠渡御有ベシト被仰渡シカバ、御殿之設、御成門ヲ建、(中略)巳御成ノ日ハ天氣晴朗タリ、渡御有シニ御膳ヲ献ズ、山海ノ珍味ヲ盡ス、御膳具ニハ金銀ヲ以テ濃、配膳御役ハ将軍家ノ近臣勤之、鬼取ノ衆中御料理ノ品々ヲ一々

- 賞試之」『古事類苑 飲食部一』六八頁、吉川弘文館、一九九八年
- 4 『御日記大略提要』寛永元年三月廿八日条・同二十九日条
- 5 『新札往来』日本教育文庫教科書編 四二三頁 同文館一九一〇年
- 6 『寛政重修諸家譜』卷第六一七、『新訂寛政重修諸家譜』第十卷二五一頁、続群書類従完成会、一九六五年
- 7 『徳川将軍の御成』四六頁、徳川美術館、二〇一二年
- 8 八尾嘉男「小堀遠州と武家の茶湯」佛敎大学大学院紀要第三五号 一二一～一四一頁、二〇〇七年
- 9 『寛政重修諸家譜』卷第七七三、『新訂寛政重修諸家譜』第一三卷、七
～八頁、続群書類従完成会、一九六五年
- 10 立石大樹「伝藤原公任筆『古今和歌集』考」『国文学』九七号 一～
一三頁、二〇一三年
- 11 小松茂美『伝藤原公任筆 古今和歌集』解説編一六八頁～一七〇頁、旺
文社、二〇〇七年
- 12 高橋義雄『大正名器鑑』第二編「解説」一頁、大正名器鑑編纂所、
一九二二年

表1 『茶会集』に記録される茶会

	年	月 日	亭主	正客		年	月 日	亭主	正客
1	寛永 1	3月 28日	松平忠郷	徳川秀忠御成	62	寛政 5	12月 19日	酒井午眠	板倉摂津守
2	寛永 17	9月 16日	毛利秀元	家光御成	63	寛政 9	4月	千玄室	
3	正保 1	10月 5日	毛利秀元	大猷院御成	64	寛政 9	3月 20日	松尾宗政	
4	寛文 6	12月 16日	老中		65	寛政 9	3月	川上太白	堀田治右衛門
5	寛文 10	11月 15日	甲府様		66	寛政 9	4月 9日	堀内宗心	水野弥一左衛門
6	寛文 10	9月 1日	水戸様		67	寛政 9	4月 22日	鴻池別荘茶湯	
7	寛文 10	2月 25日	紀州様		68	寛政 9	8月 4日	川上太白	河原林三郎兵衛
8	寛文 10	3月 22日	瑞竜院様		69		11月 15日	東門跡	
9	寛文 10	6月 3日	永井伊賀守		70	寛政		鴻池	
10	延宝 2		瑞竜院様		71			藪内紹智口切	坤巻
11	延宝 5		恭心院様		72	寛政	6月 3日	古筆了意	森丈太郎
12	延宝 5		水戸様		73	寛政		松尾宗政	
13	延宝 5		紀州様		74	安永 4	12月 19日	西市佐源	
14	元禄 13	1月 17日	池嶋立佐		75	天明 5	10月 10日	松尾宗政	田井宗物
15	宝永 2	11月 19日	東海寺怡溪和尚	松木次郎右衛門	76	天明 5	10月 15日	千玄室	松尾宗政
16	宝永 2		岡村新右衛門		77	天明 5	10月 20日	三谷宗鎮	閑松寺
17	宝永 6	11月 8日	坂本目之介	野田弥左衛門	78	天明 5	10月 23日	田中宗西	松尾宗政
18	宝永 6	12月 13日	怡溪和尚	神田安休	79	天明 5	11月 24日	藪内紹智	吉田孫助
19	享保 10	2月 5日	野田酔翁	宇田川与惣左衛門	80	天明 5	11月 25日	三井三郎助	吉田孫助
20	延享 1	10月	本多隠岐		81	天明 5	11月 3日	久田宗参	吉田孫助
21	天明 2	2月 11日	板倉伊勢守	松平出羽守	82	天明 5	11月 3日	小刀屋太兵衛	松木一貞
22		10月 8日	松平大学守	押田佐渡守	83	例年		大徳寺利休忌	
23			小堀和泉守		84	寛政 9	10月 11日	水戸黄門公	
24		9月 7日	小堀和泉守	吉田孫助	85	寛政 9	10月 22日	宇佐美懸斎	佐藤傳弥
25		5月 16日	有馬兵部大輔	芝田三右衛門	86	寛政 9	11月 2日	青山大膳亮	
26	寛政 5	10月 16日	川上太白	千宗佐	87	寛政 9	9月 29日	大坂八木平	
27	天明 1	3月 16日	松尾宗政	渡辺飛驒守	88			山越宗玄	
28	天明 5		松尾宗政	田中宗西	89			竹屋坊主	
29		12月 16日	松尾宗政	本御門主	90	寛政 9	10月 9日	蓮生寺	村田七右衛門
30		4月 15日	松尾宗政	奈倉道伯	91	寛政 9	10月 13日	高尾	
31			松尾宗政		92		10月 15日	山中忠三郎	村田七右衛門
32			松尾宗政		93		10月 19日	秋山道格	黒川彦左衛門
33			松尾宗政		94		11月 2日	黒川彦左衛門	村田七右衛門
34		9月 26日	松尾宗政		95			板倉伊勢守	
35	天明 8		松尾宗政		96	寛政 9		千玄室	
36		1月 1日	松尾宗政		97	寛政 9	12月 4日	松尾宗政	
37			松尾宗政		98	寛政 9	11月 15日	川上太白	杉山傳藏
38	寛政 3		千宗佐		99	寛政 9		水戸黄門公	
39	寛政 3		千玄室		100	寛政 9	8月 18日	藪内紹智	大徳寺獨庵
40	寛政 3		藪内紹智		101	寛政 10		松平加州公	
41	寛政 4		千宗左		102	寛政 10	9月 9月	松尾宗政	
42	寛政 4		千玄室		103	寛政 10	10月 15日	久田宗参	
43			千宗室	極楽寺	104	寛政 10	10月 25日	藪内紹智	久田宗三
44	寛政 4	5月 1日	久田宗参	原静脩	105	寛政 10	10月 1日	三谷宗鎮	
45	寛政 6	4月 9日	藪内紹智	安楽院法印	106	寛政 10		千玄室	
46	寛政 6		松尾宗政		107			川上太白	
47	寛政 6	10月 25日	千玄室		108	寛政 11		今日庵	
48	寛政 6		堀内宗心		109			楽只軒	
49	寛政 7	2月 0日	松尾宗政		110	未	11月 24日	松尾宗政	
50	寛政 6		久田宗参		111	寛政 12		川上太白	如心斎 50回忌
51	寛政 7	4月 12日	千不菴庵	右田庄右衛門	112	寛政	12月 13日	松尾宗政	加藤仁右衛門
52	寛政 7	10月	□右之介 25回忌		113			大久保新右衛門	飯尾傳兵衛
53	寛政 7		千玄室		114	寛政 12	9月 30日	千玄室	村瀬大藏
54	寛政 7		堀内宗心		115	寛政 12	10月 3日	川上太白	川上不羨
55	寛政 8		千玄室		116		11月 3日	中山備前守	大塚新五郎
56	寛政 8	冬	山越宗玄		117 (寛政 13)		1月 21日	林立見	磯谷源右衛門
57	寛政 7	12月 23日	久田宗参		118			式人之茶湯	
58	寛政 8	5月 10日	久田宗参		119 (享和 1)		11月 3日	三宅了閑	磯野長右衛門
59	寛政 5	9月 26日	松尾宗政		120 (享和 2)		1月 7日	祝邊惣五郎	鈴木定八郎
60	寛政 5	11月 25日	水村仁兵衛	斎藤逸翁	121			野呂井刑部	
61	寛政 5		川上太白						

() は推定